慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学の自然科学的基礎（下）(比較経済学序論)
Sub Title	
Author	上原, 好咲
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.12 (1922. 12) ,p.1787(153)- 1792(158)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221201-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

所有者がその貨幣を資本に轉化するには、彼は市場において二重の意味に於て自由な自由勞働者と會はなければならない。勞働者は自由人として彼の勞働力を自身の商品として處分し得る自由と、他方においては販賣すべき他の何等の商品を所有してゐないこと、即ち彼の勞働力の實現に必要なすべてのものに不足してゐると云ふ意味の自由である。」(Capital. Vol. I. English Translation by Samuel Moore and Edward Aveling. Kerr ed. pp 185-186 ことこのことが現代勞働者の特徴である。

かくの如き地位にあることによつて、プロレタリアートはブルジョアジーのために、その餘剰勞働を奪掠される。かくて兩階級間の鬪爭は行はれるのである。マルクスはこの階級鬪爭における(一)ブルジョアに對する個々の勞働者の鬪爭時代(二)一地方における一勞働部門の勞働者の鬪爭時代、(三)組合形成時代、(四)政治的鬪爭の時代、(五)革命的プロレタリアの成立時代の五期に分つてゐる。(Manifest. Ss. 33-37) さうしてプロレタアートの勝利を豫言してゐる。この鬪爭の中心問題は餘剰勞働の搾取である。故に共産黨宣言は云ふ。「あらゆる社會の歷史は階級對立の中に發展してゐる。さうしてその階級對立は時代時代に從つて、この形態を異にしてゐる 然しその形態は如何にもあれ、社會の一部分が他の部分を搾取すると云ふ一點は總ての過去の諸時代に共通な事實である」と。(S. 44) 今この問題を論ずるにはマルキシズムにおける最も重要な問題である階級鬪爭の問題に突入しなければならぬ。マルクス主義の社會階級論はこの部分の研究によつて完結さるべきである。けれどもそはかくの如き一小論文のよくし得るところでない。他日その機會を得れば筆者の幸福はこれに過ぎない。(一九二二・一一・一二稿了)

訂正、前號拙論の最後の二行「然らば……次の問題である。」を削る。(前號六三頁)

經濟學の自然科學的基礎（下）

（比較經濟學序論）

上原好咲

以上エネルギー説に依つて生產の物理學的意義並に價値の物理學的根據を説く Mukerjee 教授は、進んで利子利潤及び地代に就き、時間を生產の一要素として居る。乃ち教授に依ると生產の要素は、土地と勞働と資本と企業とそして時間なのである。曰く「生產過程に於ては更に時間なる一要素が、作された仕事の中に入り込む、從つてエネルギーの評價は時間關係 (time-relation) を含むものである。そして這が利子の物理學的説明であつて、即ち利子は時間價値を均等にするもの (the equaliser of time-value) である。同樣に利潤の可能なる所以は、潛勢力の現勢力への又は其の反對の變形過程に於て、物質の交互置換を通じ單なる形態的再分配に依つて、人間の慾望滿足に適ふやうにされたエネルギーの量が增加される所にある。但し當該エネルギーの總量には何等增減を來さないのである。……地代の現象も亦特殊の取扱を必要とするものではない」と。

次で賃銀及び勞働の物理學的意義如何であるが、其の前に生產能率に關する所論を見るに、多くの經濟學者は此點を勞働即ち人力と機械力とに關して見て居るだけであるのに反し、Mukerjee 教授は、之を自然界のエネルギー資源の節用といふ點に關連させて居る。そして更に社

會組織の上から論じて、所謂コムミユナリズムの理想に及んで居る。福田博士の國民經濟講話に「物を亡ぼして價値を造る」例として朝鮮人參燒棄ての例が擧げられて居るが、Mukerjee 教授に依ると生產は斯かる所謂經濟價値の上からのみ考へらるべきものではなくて、變形されたエネルギー態の人類社會との關係からも考へられねばならぬ。寧ろ後者が生產的か不生產的かの決定上重要なのであつて、即ち自然界のエネルギーを人力の屆かぬ遙かなる距離に散逸せしめる程度が大であればある程其の行爲は不生產的である。此反對は科學の發達に依つて廢物利用浪費防止等を通じて達せられるが、而かも其れだけでは甚だ不充分であつて、更に重大な要件は社會組織の如何である。即ち「人力といふ上から言つて有利であるとされるものは往々にして自然力の上に永久的の損失を暗示し、此損失は早晩全社會若くは全人類に大なる傷害となるのである。人類其のものゝソリダリテイーの利害關係から人は自然に從はねばならぬのであつて、此服從こそ宇宙間(munera lcrrae)の天惠の社會的利用及び社會的滿足を意味するものである。そして此社會的利用及び滿足こそコムミユナリズム――宇宙の共同遺產と人間道の成果とに對する萬人の參與――の美妙な理想を滿足させる唯一のものである。」

そこで生產及び消費の生物學的研究として勞働を論ずる所に依ると、勞働の自然科學的意義は、人間といふ有機組織を一個の生命ある機械若くはエネルギー・トランスフォーマーとして理解することに依つて明かとなる。乃ち人間が勞働を遂行すること、即ち勢力の變形行程に從ふに當つての第一次的の動機は、衝動、希望、慾求、禮節心等に在ることは言ふまでもないが、實現された勞働そのものはエネルギーの消費、換言すると過去に於ける一定の交互置換又は併置に依つて蓄藏された潛勢力の放散或は再分配を意味するのである。そして人間といふ機械の內に起る此勢力變換なる事實が勞働生理學に於ける中心的事實であつて、生理學的に見た勞働が前說した生產の物理學的局面と同樣のものと見られる所以も亦其處に在る。則ち對等及び變形の物理學的法則は、人間の勞働及び其の條件にも適用され得るのである。併し生物的作業には純然たる機械的作業と自ら異らねばならぬ次のやうな特殊な現象が伴はれる。乃ち人間が生命ある有機體であるといふ事は、當然自ら放散するエネルギーの貯藏に補塡を必要とするのであつて、此必要は人間が動物的に固有する個人的慾望及び滿足が自然裡に生理上の均衡を保持するといふ事に依つて充たされるのである。但し此慾望の滿足には資料を要する。そこで合理的生產行爲の內に正義といふ分子が含まれて居る譯である。換言すると勞働は其れが合理的の生產に從ふものである以上、勞働に依つて消費された人體の生理的組織の復修を伴ふものである。此復修に當るもの夫れが消費であるが故、經濟學に於て消費なることは生產の從となるべきものではなくて、共に生命の保持及び進化に必要な唇齒補車の關係に在るものである。

然らば合理的生產に依つて消費されたエネルギーの補塡は如何なる程度を必要とするかといふと、人體の生理的必要の要求する所即ち生命支持に必要な充分な資料が夫れである。尤も所謂最低生活費なるものは一般經濟學者の既に是認する所ではあるが、Mukerjee 教授に依ると彼等は未だ生理學上の基礎を充分に考へて居ないのである。

以上の所は必ずしも教授獨自の見解と言ふことは出來まいが、次に勞働を以て單なる苦痛或は愉快といふ點からのみ説明されるものではないとする説は、一般經濟學者と見方を異にして居る所であらうと思はれる。曰く「勞働或は其の報酬は單に苦痛或は愉快といふ點からのみ説明されるものではない。何となれば勞働も其の報酬と共に生命的欲求且つ生命的衝動の問題だからである。從つて效用なることも快樂主義的の推算から評量するのは誤りであつて宜しく生命的勢力を以て量らねばならぬ。乃ち力學及び勢力學の法則が生理的作用に愈々大いに應用されると共に、勞働、報酬、效用は、エネルギー學の立場から生命的エネルギーを以て推算されるに至るであらう。そして這は生産費及び勞銀の算定上、需要供給關係に依る一時的決定又は愉快及び苦痛の點から推量される不安定の限界效用主義より、遙かに堅固な科學的基礎を與へるものであらう。」然りとすれば勞働の報酬が苦痛の報酬としての愉快及び滿足といふ形に於て見られることは、エネルギーの補償といふ點に於て甚だ不充分のものと言はねばならぬ。そこで「エネルギー學に基礎を置く力學的經濟學の新概念は、此補償を新生産に向けられ能力といふ形に於ける失はれたエネルギーの恢復と考へるのであつて、其の能力とは單に生命支持の力乃至其れが副産物として齎らす健全な愉快及び滿足を意味する許りでなく、一層重大なことには其の人間の價値生産者としての力學的力を含むものである。そして此能力は更に健全な家族生活と子孫哺育の能力をも包含せねばならぬ。何となれば社會的效用又は社會的生命力の上から見て種族の回復は此生理的回復の一部分だからである。」

「處が自然に合した生産消費の正常狀態である此根元的の均衡にして、何等かの分配形式の下に間接的生産及び消費に依つて破られて居るならば、其れは其の經濟制度の害惡と缺陷とを證據立てゝ居るものである。不生産的消費、過重勞働、社會的寄生階級、商人或は資本家に依る生産結果の壟斷、暴利的地代等は、人間の仕事の基本主義である、消費と報償との均衡を破り、自然界の正義を紊亂するものである。」茲で教授は比較經濟學及び鄕土經濟學の觀念を暗示して居る。乃ち前段に續いて曰く、齊しく勞働と謂つても其の形態、質、等級等が異るが如く、夫々の場合の塡補及び報酬亦相異なる。但し「分配及交換界の正義の內容となつて居る社會的及び道德的正義の諸形態は、實に生理學的正義そのものを根底に置かねばならぬ。生産消費の自然狀態の下に於ては不勞增收、獨占的利潤其の他拘束的な社會制度乃至法制に基く特殊の利益の存在する餘地はなく、唯正義そのものが夫々異なる等級或は質の勞働に依る特異の仕事に對して各種の報償を保證するのである。……處が需要供給の間に働く自由競爭主義は、往々高級な技術的知識的或は社會的の仕事を市場の低級な水準に墮落させるものであり、且つ其れ等高尙な社會的價値を創造すべき優れた能力の培養に必要な特殊の生物學的條件を害するものである。單なる經濟的人間の競爭に基礎を置く分配制度は、一方に於て特殊な優秀な才能を保持するに充分な條件を與へると共に、他方に於ては動的な圜境に對する進步的應化の裡に進む勞働及社會的作用の絕えざる向上的分化運動を阻害しない處の、善良な健全な社會的習慣に依つて制限され訂正されねばならぬ。……消費されたエネルギーの補塡或は回復に關する生物學的原

理から發生する分配と謂ふ經濟現象は高尚な道德的水準に於けるエネルギー對等の法則に支配されるものであつて、亦は單に生產に於けるが如き數學的比例を採る許りでなく、更に物理學並びに生物學的對等の法則から生まれる道德的並びに社會的正義の上からの比例を含むのである、處で相異なる經濟的地域に於ては生活價値の組み合せが亦相異なるのであつて、從つて道德的並びに社會的正義の相對的評價は、社會的職能作用の種類及び等級を異にするに從つて、其比例を異にする。此點に就ては後段に詳說するであらう。併し此社會的相對的評價の相異に從ふ道德的社會的正義の異動は、人體エネルギーの消費と補塡とに關する生理學的考察から引き出される數學的公式並びに生產過程の內に含まれる物質的エネルギーの消費の設定する限界內を守るものである。そこで相異なる經濟的中心地域に於ける勞働の相異なる水準若くは規模を、經濟的需供關係乃至は物理學的生理學的觀點から研究すると共に、更に且つ主として各經濟的地域に於て經濟組織を基礎とする社會的價値の規模との對照上に研究することは比較經濟學の仕事の一つである。」

以上に於て吾々は Mukerjee 敎授が唯物史觀說を取入れて居ることを知るのであるが、併し敎授に取つては人間が世界といふ舞臺に立つ唯一の役者ではないのであつて、外に神が在る。「彼等（人間）はまた……第二に神と唯一萬金の關係を結ぶことに依つて個人及び社會的關係を改更した、以て最も優秀な社會的價値を有つに到るのである」と謂ふて新しい神々の出現を豫想するものである。但し此れ等の點は他の機會に讓り一と先づ稿を閉づる（完）。

理財學會々報

理財學會秋季大會　十月二十五日午後零時半より大ホール於て開催す。

將來の社會に於ける實業家の任務　上田貞次郎氏

英吉利經濟學に於ける價値論　小泉　信三氏

我國資本主義の起源に就いて　佐野　學氏

財政整理に就いて　濱口　雄幸氏

佐野學氏は、病氣の爲當日欠席せらるゝの止むなきに至りたるが爲め加田哲二氏原稿の代讀を行はれたり。濱口氏の講演は約二時間半に亙り、閉會せるは七時數分前なりき。

閉會後萬來舍に於て濱口氏並に今回歸朝せられたる向井敎授を主賓として晩餐會を開く出席者次の如し。

濱口雄幸氏　向井敎授
氣賀　加田　金原　津田諸敎授

幹事　三年　稻上　西村
二年　樫森　加來　竹中　平野
一柳　山田
一年　江守　駒崎　林